

知らないうちに、気付かないうちに…

皆さんは、携帯(スマホ)を持ち始めて、どれくらい経たれましたか？私は、「すぐに連絡が付くから」という理由で妻とともに持ち始めて10年以上経ちました。東日本大震災の時に「津波が宮崎にも押し寄せてくるのではないか」という囁きが人々の不安に煽られて巨大な情報となり、当時専業主婦だった妻に「逃げろ！」と携帯から電話したことを覚えています。

メールやカメラなどの機能の発展・充実に伴い、便利さ・快適さを叶えてくれる道具として、いつの間にか手放せない存在になったスマホ。若者ほどは使いこなせていないものの、仕事からプライベートまで使用頻度は高く、今や、ないと困るとまで思ってしまう自分がいます。10年前は、なくても全然平気で、生活にも困らなかったのに、どうしたものだろう…？と、ふと考え込んでしまいます。

偏った情報にとらわれる

検索エンジンやYouTubeを使用していると、使用履歴に応じて好みに合った情報が勝手に優先的に表示されます。そうすると、自分と異なる意見や様々な情報に触れることがなくなっている状態に陥ります。これを「フィルターバブル」と言います。また、SNSは、考え方の似た者、同じ趣味の者同士が交流し合うことが可能となる場です。そうすると、特定の意見や思想が増幅され、より偏った方向に向かってしまうことになります。これを「エコーチェンバー現象」と言います。

カタカナ文字の羅列に辟易しますが、日本はモバイル端末の使用率は世界の中で突出している(ツイッター利用者割合も世界一とか)にも関わらず、その弊害には無頓着なので、研究が遅れていると言われます。

前号で取り上げた「ゆたぼん」やその父親は、支援者が多いものの、一方で批判も多く、彼らが「アンチ」と呼んで批判に一切耳を傾けない姿勢に、これまた、「自分に都合の良い解釈しかしていない、偏った考え方だ！」と批判を浴びています。まさに、イタチごっこ。



【つきたておもち、おいしいー】

フィルターバブルやエコーチェンバー現象は、そもそも使用者に便利となる機能として開発されたものの「副反応」と捉えることができます。“便利さを追求すると、代償を払うことになる”これは、現代社会の闇の部分であり、この警鐘に人類はどう向き合っていくべきなのか、グローバルな取組(SDGs等)が進められています。しかし、何につけても商業主義(もうけ話に結び付けようとする)が纏わり付く側面があることを理解し、マスコミや世論に扇動されないようにしたいものです。“うまい話には裏がある”人間は知らないうちに、気付かないうちに、マインドコントロールされ、自分で思考・判断する力を奪われることを肝に銘じないといけないと改めて思います。自分は偏った情報しか取り入れていないのではないかと自分を客観視する冷静さは、依存に陥ると保てなくなります。

デジタル・シティズンシップ

情報化社会の進展に伴い、学校教育では、これまでPC操作の知識・技能を向上させることと同時に「情報モラル教育」を進めてきました。「ネット社会の歩き方」「コンピュータを使いすぎると…」などがその例です。ここでは、「～してはいけ

ない」「～しないほうがよい」という文言が多用され、デジタルメディアに対してネガティブな見方がされてきました。そういう教育をしてきたはずなのに、ゲーム脳やスマホ依存、誹謗中傷によるいじめなどの問題が多く生じているのは、何を意味しているのでしょうか。

社会や国民の意識の変化に応じて、これからは「デジタル・シティズンシップ」の考えや教育が広まっていくことが予想されます。Society5.0と言われるとおり、日常生活はますます情報化、デジタル化が進みます。社会人としての心構えを身につけていく中で、ネット上の振る舞い方やスキルも身につけようという考えです。これまでは、デジタルに対して「～しない」という行動抑制を求めがちでしたが、これからは自分で、「1日の中で、どのメディアをどのくらいの時間、どんな目的や理由で使うかを考え、使い方を調整すること」を求めています。リスクがあってもどんどん活用していく、負の部分よりも正の部分を伸ばすように使っていくスタンスです。

最近の若者は、かなり早い時期からデジタルメディアを使い始めていることもあり、何らかのトラブルに陥った経験をもっています。ですから、はまり込まないようにどうしたらよいかと試行錯誤しています。ネットの利用時間が長かろうとも、自分の心身や生活に悪影響がなく、目的とすることができればよいという意識をもっています。折り合いをつけながらうまく使うことができているということですね。今後は、この現状を踏まえて、デジタル・シティズンシップなのです。

脳科学者の危惧

「脳トレ」でお馴染みの脳科学者川島隆太氏(現、東北大学加齢医学研究所長)は、最近、ショッキングな話をされています。内容を一部箇条書きで紹介します。

- フリック入力(キーボードではなく、スマホのタッチスクリーンで使われる入力方法)という簡便な操作に慣れた若者の間では、リアクションだけのやり取りやコピペが当然のように行われている。言語コミュニケーションをしないうえ、考える力を奪われている。
- 個人主義の横行から、人と関わることは面倒だ、一人が心地よいと思う人が増える傾向にあったが、コロナで拍車がかかった。コミュニケーションを忌避する世代は子孫を残さない。これは、少子化の原動力であり、滅びゆく種族の最終形態かもしれない。ICTが人類終焉のスイッチを押したということである。
- ICTは、人類にとって良い技術だと信じられているが、楽で便利がいいとは、低きに流れるということである。介護の世界では、バリアフリーでは寝たきりが増えることが分かりあえてバリアを作る方向に動いている。“敢えて負荷をかけて、もともとの力を引き出す”である。
- 分からないこと、複雑性をはらむ問題について意思決定すると間違ってもいいけれど、そうやって失敗してまたやり直すことに意味がある。今の若者は、間違いや挫折を極端に排除しようとしている。
- 人はぼんやりしているときに、実はアイデアが湧くように脳内はネットワークされている。何かに集中しているとアイデアは湧かない。スマホが手元にあると頭は動かない。
- アメリカは教員削減のためにデジタルデバイスを使っている。子どもは学校に来なくて良くなる。不登校、教員不足の問題を抱える日本は、まっしぐらに進むだろう。